言語への機能的－類型的アプローチ

小　野　良　美

1. INTRODUCTION

本稿は，Givón (1984)に代表される，言語への機能的－類型的 (Functional－Typological) アプローチという考え方を紹介することを目的とする。このアプローチは，従来の構造主義言語学 (Structuralism) や，生成・変形文法 (Generative－Transformationalism) などの言語観に疑問を抱いた言語学者たちが，それらとは異なった見方によって言語を説明しようとするものである。

言語学において機能主義 (Functionalism) というのは，決して新しい動きではない。構造主義言語学のバイブルとも言われる Bloomfield の *Language* (『言語』) が1935年に世に出る以前，プラーグ学派(Prague School)と呼ばれる言語学のサークルが1926年に結成されたが，そのメンバーは，言語の構造はその機能によって決定されるという信念をもっており，第二次世界大戦前のヨーロッパの言語学に影響を及ぼしたといわれている。[1)]

その後の構造主義言語学のめざましい発展，そして革命とまで言われたChomskyの生成・変形文法への転換といった大きな言語学の流れの中で，この機能主義的な言語観は久しく表舞台での議論の対象となることがなかったが，1970年台後半から，生成主義への挑戦という形で再び台頭してきたものである。

2. FUNCTIONAL－TYPOLOGICAL APPROACH

まずはじめに，この新たなアプローチがどのようにして生まれたかとい

う背景について，Givón が *Syntax* (1984) という著書の“BACK-GROUND”と題した序章のなかで述べている言葉を引用してみよう。

> The approach to the study of Syntax adopted in this book developed gradually as a rejection to all the tenets of the transformational－generative tradition as listed above. It feeds on the functionalism inherent in Jesperson, Bolinger and the Prague School. It draws from Greenberg's typological approach to the study of structural and functional universals....[2)]
>
> (本書で取り入れているアプローチは，上記の変形・生成主義のすべての考えへの拒絶から，徐々に発展したものである。このアプローチはJespersen や Bolinger，そしてプラーグ学派の機能主義の流れを汲んでいる。またこれは Greenberg の構造的そして機能的普遍性の研究への類型的アプローチからアイデアを借りている。[筆者訳])

彼も他の言語学者たちと同様，生成・変形文法の枠組みの中で言語学を学び，訓練を受けて来たわけであるが，かつて Chomsky が構造主義言語学に行き詰まり，そこから脱却して新しい言語理論を展開したように，Givónもまた生成主義ではどうしても解決できない様々な問題にぶつかり，それらをどう説明すべきかを探っていくうちにたどり着いたのがこのアプローチであったわけである。では Givónらの言語観がどのようなものであるかを，上で彼が拒絶すると述べている生成主義との比較において簡単にまとめてみよう。

a．生成主義においては，言語を二つのレベル，すなわち『言語能力』(Competence) と『言語運用』(Performance) とに分類し，言語学の取り扱うべきレベルは，実際我々が話したり書いたりする，いわば“生の言語”とも言うべき『運用』の方ではなく，我々の頭の中にあ

る言語のシステム，いわば理想的な“正しい”言語の『能力』の方であるとしている。つまり，我々が実際に使っている言葉というのは，“間違い”も多いし個人差もあるので，有用なデータとしては使えない。我々が追及すべきことは，それら実際の言語運用を可能にし，それらを生み出す（生成する）ところの言語能力の仕組みを解明することにあるというのである。一方機能主義においては，このような二つのレベルは認めない。我々が実際に使っている言葉が言語であり，それをデータとして分析する。実際に使われている，つまり実在するものをデータとして取り扱う以上，“正しい”とか“誤り”とか言う問題ではなく，ありがちな表現や実際には無さそうな表現，あるいは様々な変種（variations）という見方をする。

b．生成主義では，言語の研究とは主に文（sentence）の構造（structure）を探ることであり，その機能について，あるいは文脈との関係についてはほとんど触れることがない。それに対し機能主義では，文の構造は，文自体の分析だけでは説明がつかないことが多く，その文が表している意味（Semantics）やコミュニケーションの中で果たしている役割（Function），文脈の流れとのかかわりや話し手と聞き手との相互作用（Discourse－Pragmatics）など様々な要素が働いて成り立っており，それゆえ言語の研究もそれらとのかかわりの中でなされるべきであると考える。

c．生成主義の，言語やそのカテゴリーはきれいに整ったシステムであるという考えにたいして，機能主義の考え方は，多くの言語現象やカテゴリーは傾向（tendency）や程度（degree）の問題であってすべてがきっちりと説明出来るものではない。したがってAともBともうまく説明のつかない中間的存在もあり，それらを説明するために，原型／典型論（Prototype Theory）をとりいれている。

d．人は生まれながらにして言語のメカニズムをもっており，そこには普遍文法（Universal Grammar）といわれるものが存在する。したがってある一つの言語－例えば英語－を研究することによって言語

のメカニズムを探ることができる，というのが生成主義の考え方である。機能主義では，ある一つの言語内の様々な現象を探ると同時に，出来るだけ多くの言語の類似現象を探り，類型的（typological）研究をすることによって，言語の普遍性を見いだしていくべきだと考える。

e．生成主義によると，言語の仕組みというのは，人が生まれながらにしてもっている非常に単純なルールのセットである言語のメカニズムから，様々な変形（Transformation）ルールを経て無限の文が生成されるというものである。一方 Givón の推察によると，言語の機能的，構造的組織というものは，人間の認知（Cognition）や知覚（Perception）などと密接にむすびついており，両者の間には自然な，あるいは必然的（non－arbitrary）な関係が存在する。言い換えれば，言語の構造には，人間の認知や知覚，概念化が反映されているということである。[3)]

以上がGivónが主張するところの機能主義と生成主義との言語観の主な違いであるが，次にGivónの言語観の中心的な位置をしめる二つの要素について述べることにする。まず，言語の“Iconicity”について，そして言語における“Functional Domain”についてである。

3．ICONICITY

言語というものは，恣意的（arbitrary）な要素と非恣意的（non－arbitrary）な要素とから成り立っている。例えば単語（word）のほとんどは，それが指し示すものとそれ自体の形（form）または音（sound）との間には必然的な関係が見られない。[4)] 日本語で［inu］と発音したり「いぬ」と書いたりするものが指し示すものを，英語では［dɔg］と発音したり“dog”と書いたりする。同じものを指していても，言語によってその呼び方は千差万別であり，それら異なった呼び方の間には何ら関連がない。「もの」とその「呼び方」との関係は恣意的である，つまり両者の間には必然的な関係が見られない。しかし，いわゆる擬声語と呼ばれるもの

の中には必然的な関係，非恣意的な要素が見られるものが多い。「いぬ」は［ワンワン／wan wan］“dog”は［bau wau］と吠え，「ねこ」は［ニャーニャー／nya : nya : ］“cat”は［myaou myaou］となく。犬や猫の鳴き声を人間の言葉に置き換えようとすると，それぞれの言語の音声組織によって多少の違いはあれ，ほぼ似たような表現になる。

従来の構造主義，あるいは生成主義では，言語における非恣意的な要素は，上に挙げた擬声語の類いなど非常に限られた部分にしか認められないと考えられてきた。殊に，統語のレベルにおいては，例えばある文（sentence）の構造とその文が意味している内容との間にはなんら必然的な関係はない，つまり恣意的であると考えられている。しかし，ある一つの言語内の様々な現象を見ても，あるいは多くの言語間に見られる共通の言語現象を見ても，言語の形（form）と機能（function）の間には密接な関係が見られる，つまりある文の構造とその文の意味内容とのあいだには必然的な，非恣意的な関係が見られるという事が，多くの言語学者たちによって研究，指摘されるようになってきた。一般にこの必然的な，非恣意的な言語の性質は，“Iconicity”という名前で呼ばれている。“icon”とは「像」とか「肖像」という意味の言葉であるが，ごく簡単に言えば，言語の形というのは我々の知覚（perception）や認知（cognition），概念化（conceptualization）といったものを図像化したもの，あるいは投影したものであるということである。それは例えば語順や文法上の地位，あるいはサイズなどに表れてくる。

3.1. 語順（Word Order）

一般的に語順というものは，言語によってまちまちであると考えられている。確かに英語はSVOという基本的な語順をもっており，日本語は比較的自由ではあるが一応SOV，ヘブル語は一応VSOである。ところが，語順は言語によってまちまちであるならOVSやOSV，そしてVOSも同様に多くあってしかるべきであるのに，実際にはこの三つは非常に少ない。圧倒的に最初の三つが多い。[5] これは何故か。

3.1.1. 動作者（Agent）から受動者（Patient）へ

ある行為がある人から他の人に及ぶ場合，当然その行為を行なった方から受けたほうへ何かが移行する。それに伴って我々の注意も動作者から受動者の方向へ移行する。それが“自然な順番”，つまり最も起こりやすい流れの傾向である。

ところで，文（sentence）の主語に最もなりやすい登場者（participant）は動作者（Agent）である。[6] つまり文の主語がその文の中で意味的（Semantically）にどういう役割を果たしているかを調べてみると動作者である場合が一番多い。そして目的語として一番多いものは，受領者（Dative）／受益者（Benefactive）であり，次が受動者（Patient）である。[7]

論理的には六通りの語順が可能であるのに，実際にはSVO, SOV, VSOの三つが圧倒的に多いわけであるが，この三つに共通しているのは，動詞（V）の位置がどこであれ，主語が必ず目的語に先行するという点である。つまり動作者から受領者／受益者／受動者へという移行が自然な流れであり，文の主語には動作者が最も多く，目的語には受領者／受益者／受動者などが最も多いのであれば，主語が目的語に先行するのは当然のことと言える。すなわち，主語が目的語に先行するのは，我々人間の知覚，認知とiconicな関係にあるのである。逆にＯＳという語順は，我々の知覚，認知の自然な流れに逆行するため，つまりiconicな関係にないため，この語順をもった言語は極めて少ないのである。

3.1.2. Attention Flow（注意の流れ）：時間的経過の順序

DeLancey（1981）は，Attention Flow（注意の流れ）と語順との関係について，次のように述べている。

> ATTENTION FLOW determines the linear order of NP's. The NP's in a sentence are presented in the order in which the speaker wishes the hearer to attend to them.... Events have an inherent natural AF,... The basis of this natural AF is

the temporal ordering of phases of the event ; other things being equal, the ordering of NP's in a sentence will reflect this temporal ordering.[8)]

(Attention FlowはNP（名詞句）の順番を決定する。文の中のNPは，話し手が聞き手に注意を注いで欲しい順番に並んでいる。... 出来事（Events）は本来の自然なAFをもっている。この自然なAFの基盤となるのは，その出来事のそれぞれの段階が時間的にどういう順番で起こるかということである。他のものがすべて同じ条件にある場合，文の中のNPの順序は，この時間的な順番を反映する。[筆者訳])

文（sentence）に，いろいろ要素が並ぶ順番は，特別な条件がない限り時間的に物事が起こる順番と一致するということである。[9)]

（1）（a）He drove from Philadelphia to Bloomington.
（b）From Philadelphia, he drove to Bloomington.
（c）*To Bloomington, he drove from Philadelphia.[10)]

上の例文において，(a) はごく普通の自然な文である。(b) と (c) では語順が入れ代わっているが，起点から到達点という順番が守られている (b) のほうはそれほど不自然さを感じないが，起点と到達点が逆転している (c) のほうは非常に不自然な文になってしまっている。日本語においても同様のことが言える。

（2）（a）長崎から　船に乗って　神戸に　ついた。
（b）神戸に　船に乗って　長崎から　ついた。？

もちろん時間的順序と一致しない語順というのはきわめて頻繁に現れるが，それは後に述べる『話題の連続性』などの法則が働いて，時間的には後に起こった出来事が先に来る場合や，ある要素に特別な注意を向けるた

め，話者／筆者の視点（View Point）が反映される場合などである。[11)]

3. 2. 統語的地位（Syntactic Status）

文の構成要素を統語的にどう位置付けるか，つまりある要素を統語的にどう扱うかという点に，我々が物事をどのように見ているかが投影される。

3. 2. 1. 直接目的語（D. O.） vs. 副詞句（Oblique）[12)]

ある登場者を直接目的語にするか副詞句にするかというところに，我々のそのものに対する見方が反映される。ある名詞（句）が直接目的語である時，それが主語の直接的影響下にあることを表す。次の例を見てみよう。

（3）（a）He rode on the horse.
（b）He rode the horse.
（c）彼は 馬に 乗った。
（d）彼は 馬を 乗り回した。

上の例文において，(a) と (c) の“on the horse”／「馬に」はそれぞれ統語的には副詞句であり，意味的には「場所」(Location) 的ニュアンスが強い。一方 (b) と (d) では，“the horse”／「馬を」は統語的には（直接）目的語であり，意味的には「受動者」(Patient) 的ニュアンスが強くなっている。つまり (a)(c) では，馬という乗り物（場所）に乗ったという事を言ってはいるが，馬を主語／動作者がどの程度コントロールしたかについては述べていない。馬に乗るには乗ったが，すぐに振り落とされてしまうかもしれないのだ。しかし（b)(d）においては，主語／動作者が馬を自分のコントロールの下においていることが述べられている。“the horse”／「馬を」を（直接）目的語という統語的地位に置くことによって，それに対する直接的影響（この場合はコントロール）を表しているのである。[13)]

(4) (a) She went deer−hunting.

(b) She hunted a deer.

(c) 彼女は鹿狩りに行った。

(d) 彼女は鹿を撃った。

同様に上の (a)(c) では，“deer” ／「鹿」に対する直接の影響は明示されていないが，(b) (d) では明らかに “deer” ／「鹿」に対する直接の影響が示されている。

3.3. サイズ (size)

ある二つの出来事に直接の関連を認めない場合，それら二つの出来事の距離が構造上にも表され，言語のサイズが大きくなる，つまり語数が多い。二つの間に，より直接的関連性を認めるに伴い，距離が縮まりサイズが小さくなる。

(5) (a) He touched the door, and it opened.

(b) He caused the door to open.

(c) He made the door open.

(d) He opened the door.

(a) では「彼」の行動と「ドア」か開いた事との間に偶発性が感じられ，直接の因果関係は明示されていない。(b)では「彼」の行動が「ドア」が開いた事の原因となっていることが示されているが，直接「彼」がその意図をもってしたかどうかはわからない。(c)においては，はっきりと「彼」の意図が示されているが，直接「彼」の手によって「ドア」が明けられたのかについては疑問の余地が残されている。(d)になると，「彼」がそうする意図のもとに直接彼の手で「ドア」を開けたことが明確になっている。

4. Functional Domains（機能領域）

Givón によると，我々のコミュニケーションは様々な Functional Domain から成り立っている。Functional Domain とは，我々が言語生活の中で果たそうとしている機能／役割のひとつひとつと言っていいだろう。そして，言語の構造にはこれらの Functional Domainがコード化されている。言い換えれば，Functional Domain は言語の構造に反映されている，さらに Functional Domain（機能）が言語の形（構造）を決定すると言ってもよい。そしてこの Functional Domain は一つの文（sentence）中に複数が重なっていたり交差していたりすることが多い。[14] このことを具体的に示すために，次に受動態（Passive）を例にとって考えてみたいと思う。

5. 受動態への機能的アプローチ

受動態というのはほとんどの場合，能動態とのペアという形で説明される。例えば，

（6）John ate a fish.

（7）A fish was eaten by John.

という二つの文について，おおよそ次のような説明がなされることが多い。能動態（6）の目的語（“a fish”）が受動態（7）においては主語になり，能動態の主語（“John”）は，受動態では前置詞“by”を伴って動詞の後にさがり，更に能動態の動詞（“ate”）は受動態では，be動詞を伴って過去分詞の形（“was eaten”）をとる。このペアは，一枚コインの表と裏のようなものであって，ほとんど意味は変わらない。

ところがこの二つの文は，実際のコミュニケーションの中ではかなり違った意味をもっている。なぜなら（6）の文はごく自然な文で，実際の会話や文章の中に現れても全く違和感がないが，（7）の文は非常に不自然な文で，実際に現れることはあり得ないと言っても過言ではない。もしこ

れらの文がほぼ同じ意味を表すとしたら，どちらも同じくらい自然な文であるはずだし，どちらが現れてもおかしくないはずであろう。しかも(7)の文は，“文法的”には誤りはないし，意味的矛盾もないし，かのChomskyの有名な

(8) Colorless green ideas sleep furiously.

に見られるような，いわゆる選択制限の違反もない。では何故 (7) の文が実際のコミュニケーションのなかで現れることはないのであろうか。その理由を探る前に，もう少し Functional Domain について具体的に議論を進めることにする。

5.1. 受動態のFunctional Domains (機能領域)

では，受動態にはどのような機能領域がコード化されているのだろうか。それを探るには受動態の統語的特徴を見てみれば良い。何故なら先に述べたように Functional Domainは言語の形に反映されているわけだから，統語的特徴として表に示されていることが多いからである。受動態には次のような統語的特徴が現れている。

5.1.1. 主語が動作者ではない。(Non－Agent Subject)

すでに3.1.1.で述べたように，主語になる可能性の一番高い登場者は動作者であるが，受動態では動作者以外の登場者が主語になっている。これはある意味で不自然なことであるから，これを引き起こす別の原因があるはずである。

5.1.1.1. 話題の連続性 (Topic Continuity)

受動態の多くは，話題の連続性によって主語が動作者以外のものになることによって引き起こされる。つまり文脈の流れから主語が動作者以外の登場者になる場合である。談話 (Discourse) というのは，普通いくつか

の情報の中から一つのものが選ばれて，それが話題（Topic）となって継続される。次の例を見てみよう。

(9) Yesterday on my way home, I met *an old man* in front of John's house. To my surprize, *the old man* suddenly started talking to me. *He* said *he* had almost been run over by a car and (ϕ) could have been killed.
（昨日学校に行く途中，ジョンの家の前で一人の老人に出会った。驚いたことにその老人は，いきなり私に話しかけてきた。彼はもう少しで車にはねられそうになり（ϕ）殺されていたかもしれないと言っていた。）

上の談話(discourse)に，he had almost been run over by a car／彼はもう少しで車にはねられるところだった，ϕ could have been killed／殺されたかもしれない，という受動態が現れているが，これは老人を話題にして話が進行しているために，話題である老人が主語になり，その老人は動作の動作者ではなく受動者であったため，受動態という形になったものである。つまり文脈の流れから，主語が受動者になったため生じたのである。もちろん

(10) He said a car had almost run over him and could have killed him.

と言うことも可能ではあるが，わざわざ新しい情報（a car）を主語にもってくるよりも，今まで続けていた話題をそのまま継続する方が，より自然なのである。実際，受動態の主語は，古い情報である場合が圧倒的に多い。古い情報とは，既に前に述べられた事がらであり，普通英語では“the + NP”や代名詞で表される。

(9) の例文にイタリックス体／下線で示したように，英語においてあ

る情報はまず新しいものとして“a + NP”で示され，それが受け継がれてゆくと古い情報として“the + NP”，代名詞，そしてさらにゼロ代名詞（ϕ）として表されてゆく。受動態の主語は，古い情報であることが圧倒的に多いということは，その誘因の一つが話題の連続性による動作者以外の主語化にあるということの実証である。

5.1.2. 動作者の降格（Agent Demotion）

受動態における統語的特徴の二つ目は，本来一番主語になりやすいはずの動作者が，統語的に非常に低い位置に置かれることである。普通英語の受動態では，もし動作者が表される時には“by”などの前置詞に伴われて，文のおしまいのほうに出てくることが多い。今，「もし表される時には」と述べたが，実際に受動態では動作者が表されることは非常に少ない。[15] このことは，受動態においては動作者はあまり重要な登場者ではないということを示している。その理由として次のことが挙げられる。

5.1.2.1. 動作者が不明／不必要の場合

動作者が不明の場合，あるいはわかっていてもその時には全く重要でない場合，動作者は登場しない。例えば以下のような場合である。

(11) This city was once completely destroyed long time ago.

(12) The missing cat was found dead on the beach.

5.1.2.2. 動作者が明らかな場合

動作者をわざわざ言わなくても相手にわかると判断した場合，動作者は登場しない。

(13) He was arrested yesterday.

(14) English is spoken in many countries.

ちなみに，動作者の降格が誘因となって非動作者が主語になったり，話題の連続と動作者の降格が同時に働いて受動態の誘因となることもある。

5.1.3. 自動詞化（Intransitivization）

三つ目の統語的特徴は，動詞が有標（marked）であり，形容詞表現によく似た自動詞であるという点である。受動態に用いられる動詞は，普通動作者と受動者を必要とする他動詞であるが，この他動詞に少し手が加えられて，英語では“be”動詞と動詞の過去分詞形をとる。“be”動詞というのは状態を表す典型的な自動詞であり，しばしば形容詞とともに用いられる。また動詞の過去分詞形というのは，その動作（action）よりもむしろ終わった状態（finished state）を表す時に用いられる形である。

(15) The door was opened.

(16) The door was open.

(15) は受動態文，(16) は形容詞文であるが，この二つを比べてみると構造の類似がよくわかる。また，

(17) The glass was broken.

こうなってくると，文脈によって“broken”は受動態ともとれるし形容詞ともとれる。更に，

(18) I was born in 1970.

(19) She is tired.

などにいたっては，受動態の形を残してはいるが，意味的にも統語的にも形容詞としてしかとれない。つまり，受動態の動詞は性質的には他動詞であるが，受動態という構造の中では，統語的には自動詞であり，意味的に

は出来事（event）や状態（state）を表す。

以上をまとめてみると，受動態には三つの統語的特徴がみられ，それらは受動態の三つのFunctional Domainを表している。受動態の Functional Domain とは次の三つである。

(20) 1．非動作者の話題化（Non－Agent Topicalization）
2．動作者の無用化（Agent Suppression）
3．動作の状態化（Semantic Intransitivization）

すなわち，この三つのFunctional Domainをコード化したものが受動態という構造であり，三つのFunctional Domainが受動態の統語構造に反映されているという事である。さて議論を戻して，再びなぜ下の文が実際に現れることはほとんどないのかを考えてみよう。

（7） A.fish was eaten by John.

その理由は，この文が我々の認知，知覚，概念化の自然さと，それを投影する言語の自然さに，多くの点で反するからである。言い換えればこの文は，我々の認知，知覚，概念と iconic な関係にないため，非常に不自然なのである。この文において，“a fish” と “John” と二つの登場者を比べた場合，“John” の方が主語になる確率のほうが “a fish” よりも極めて高いのである。なぜなら

(21)（a）人間の方が人間以外のものよりも主語になりやすい。
（b）コントロールする側の方がコントロールされる側よりも主語になりやすい。
（c）特定のものの方が，不特定のものよりも主語になりやすい。
（d）古い情報の方が，新しい情報よりも主語になりやすい。

これらの条件に反する（7）の文を生じるような文脈を作る，あるいは文脈が出来ることは極めて不自然なのである。従ってこのような文が実際に現れることは，非常に希なわけである。

6. CLOSING

最後に，ヘミングウェイの『老人と海』の全文から受動態が使われている文を拾い出した結果を示して終わりたい。（Appendix 参照）文の主節，もしくは従属節に受動態が使われている例は，全部で32あった。そのうち節の主語が代名詞であるものが18，主語が“the ＋ 名詞”であるものが8，“所有格の代名詞 ＋ 名詞”が主語であるのが2であった。残りの4つのうち，一つは明らかに先出のものを受けており，以上32のうち29までが古い情報，を主語としており，話題連続性（Topic Continuity）の影響で引き起こされたものである。また，32の受動態のうち，動作者が“by”を伴って現れているのが4，“with”を伴っているものが1，計5で，残りはすべて動作者なしの受動態であった。

NOTES

1） Lyons, p. 246
2） Givón, p. 9
3） 詳しいディスカッションは，Givón, pp. 6－10
4） 漢字のような表意文字には非恣意的な関係が見られる
5） Greenberg, pp. 76－77
6） Givón, p. 139
7） Givón, p. 169
8） DeLancey, pp.632－633
9） この点については，DeLancey, pp.635－639を参照
10） DeLancey, p. 633
11） 詳しいデスカッションは，DeLancey, pp. 635－639
12） 本稿では主語，目的語以外の登場者（いわゆるnon－argument participants）を便宜上「副詞句」(oblique) と呼ぶ
13） 日本語における主語の「～を」という目的語にたいする影響についてはSugamotoを参照

14) Givón, p. 33

15) Shibatani, p. 831によると，Jespersen, Svartvik, Yamamotoなどの研究に，英語や日本語の受動態のうち約70－80%がAgentless Passiveであることが示されている

参考文献

DeLancey, Scott. (1981) "An Interpretation of Split Ergativity and Related Patterns." *Language*, 57. 3. 626－657

Givón, T. (1984) *Syntax: A Functional-Typological Introduction.* Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.

Greenberg, H. (ed., 1966) *Universal of Language.* Massachusetts : The M. I. T. Press.

Haiman, J. (ed. , 1985) *Iconicity in Syntax.* Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.

Lyons, J. (1981) *Language and Linguistics.* Cambridge : Cambridge Univ. Press.

Shibatani, M. (1985) "Passives and related constructions." *Language*, 56. 4, 821－848

Sugamoto, N. (1982) "Transitivity and Objecthood in Japanese." In *Syntax and Semantics* 15, ed. Hopper and Thompson. New York : Academic Press.

APPENDIX
PASSIVES IN *THE OLD MAN AND THE SEA*

Main Clause and Subordinate Clause

1. *the sail* was patced with flour sacks, and furled (5)
2. where *the skiff* was hauled up (6)
3. where *they* were hoised on a block... *their lives* removed, *their fins* cut off and *their hides* skinned out and *their flesh* cut into strips (7)
4. *you* nearly were killed (8)
5. when *they* were brought alongside (10)
6. *the shack* was made *of the tough bud-shields of the royal palm* (11)
7. *his shirt* had been patched so many times (13)
8. *the patches* were faded (13)
9. where *the baits* were stored (21)
10. *all the projecting part of the hook*.. was covered *with fresh sardines* (25)
11. each sardine was hooked through both eyes... (25)

12. *each line* . . . was looped . . . (25)
13. *it* was considered a virtue not to talk unnecessarily. . . (33)
14. *the myriad flecks of the plankton* were annulled now *by the high sun* (33)
15. *he* has been hooked before. . . (36)
16. *I*'m being towed *by a fish*. . . (38)
17. *he* has been hooked many times before (41)
18. now *we* are joined together and have been since noon (43)
19. *they* were all connected (44)
20. *that* can be replaced (44)
21. *he* was pleased (46)
22. *the walls* were painted bright blue. . . (61)
23. *it* be called a draw . . . (61)
24. *his small line* was taken *by a dolphin* (63)
25. was *he* frightened *by something*. . . ? (74)
26. *it* was there, cleaned and ready. . . (76)
27. but *man* is not made for defeat. . . (93)
28. *a man* can be destroyed but not defeated (93)
29. he knew *he* was beaten now finally. . . (107)
30. *she* is sound and not harmed. . . (108)
31. *that* is easily replaced (108)
32. when *you* are beaten (108)

Relative Clause

33. *the sail* that was furled around the mast (5)
34. *the club* that was used to subdue the big fish (10)
35. *the royal palm* which are called guano (11)
36. *a yellow jack* that had been used before. . . (25)
37. *two forty–fathom coils* which could be made fast. . . (25)
38. *the tiny fish* that were coloured like the trailing filaments (29)
39. *people* who are paid to do it (94)

Adjective

40. *he* was barefooted (14)
41. *the door of the house*. . . was unlocked (20)
42. *they* were completely carapaced. . . (30)
43. *they* were snow－capped. . . (33)
44. *I* was born for (43)
45. *he* was too tired even to examine. . . (47)
46. *his sword* was . . . tapered like a rapier. . . (54)

47. *the fish* was not panicked (54)
48. *I* am not nauseated (71)
49. *that* was bound to come (78)
50. *I* am not unarmed (94)
51. *they* were headed straight . . . (101)
52. I hope *no one* has been too worried (103)

Infinitive

53. there was *nothing* to be done (38)
54. *he* did not like to be cut . . . (49)
55. it is unworthy of *it* to be cramped (55)
56. *he*. . . allowed himself to be pulled forward. . . (65)
57. there is very much *slave work* to be done now. . . (85)
58. but there was *nothing* to be done now (93)